方丈記　第六回

　また、ずいぶん前のことなのではっきりとは覚えていないけれども、たしか養和元年のころに、二年ほど、飢饉で世の中が、たいへんひどいことになった時があった。春や夏には日照りが続き、そうかと思うと秋には大風が吹いて洪水になるなど、良くないことばかりが続いて、五穀は実らず、そんななかにも春が来て、人々は空しい想いを抱えながら田の土を耕し、夏に向けて稲の苗を植えたけれども、かといって、秋に収穫に浮かれて騒ぐこともなければ、冬にそれを蓄える喜びもない。どうしようもなくて人々は、田畑を捨て、国境を越えてどこかに行き、あるいは、家にいても仕方がないからと山の中で暮らし始めるものもいた。朝廷ではいろんな祈祷などが始まり、通常では行われないような儀式なども行われたけれども、その効果が現れる兆しすらなかった。

　京の都の暮らしというのは、なにからなにまで、みんな、田舎を頼りとして成り立っていて、その田舎で獲れるものが無ければ、それが京にもたらされるわけもない。そうなってしまっては都の人たちも、平生のようにのんびり構えて体裁を取り繕ってなどいられるはずもない。お祈りをしたり倹約をして質素な暮らしに努めたところで、それにも限度がある。家にあるいろんな宝物などを、片っ端から捨てるようにして手放して食べる足しにしようとするけれども、そんなものに目を留めるような人などいるはずもない。たまたまそういう人がいたとしても、宝物などより粟の方が価値があるのは当然。やがて路には乞食が溢れ、聞こえてくるのは、世を憂い悲しむ人々の声ばかり。

　養和元年はこうして過ぎて年の瀬となり、明くる年こそ、そんな状態から人々が立ち直ることが出来るかと思いきや、状態は変わらず、それに加えて疫病がはびこり、惨状はますます高じて、もはや都の面影などどこにもなく、人々はみな、飢えや病に倒れ死んだ。それは日を経るごと極まって、まるで、わずかしかない水のなかで苦しむ魚のよう。とうとう、頭に笠を着け、足にはちゃんと履物などをつけた、ちゃんとした身なりの人までが、必死に家々を回って物乞いをする始末。そんなふうに困窮して、すっかり惨めになってしまった人たちが、いま路を歩いていたかと思うと、急にばたりと倒れて息を断つ。土壁が巡らされた家の回りにも、道端にも、数えきれないほどの、飢えて死ぬ人々の姿。そうして亡くなった人の骸をどこかに持って行って葬ることなどできるはずもなく、悪臭があたりに満ちて、日に日に変わっていく死人の姿は目も当てられない。街中でさえそんなことばかりが多く、ましてや賀茂川の河原などに行けば、道はそんな死体で覆いつくされて、馬車さえ通れない。

　身分の低い賤しい者や、山に住むきこりさえも力尽き、煮炊きをするたきぎさえもなくなって、頼りにする人などのいない者のなかには、自分の家を壊し、たきぎとして市場で売る者もいた。しかし、そんなふうにして、家の柱や調度などを売ったところで、得られる対価は、せいぜい一日を食いつなげるかどうかの食料。

　そうして市場でたきぎとして売られている木のなかには、どう見てもいかがわしいものもあり、赤い漆が塗られてあったと思われるものや、ところどころ金箔や銀箔などの箔が見えるものもあり、どうしてこのようなものがあるのかと尋ねれば、どうやら、どうにもこうにも立ち行かなくなった者どもが、古寺に押し入って仏像などを盗み、あるいは本堂の飾りや仏具などを、壊し盗んできたものを粉々に割って売ったものらしい。何の因果か、世が乱れ、汚らわしいことや邪悪なことばかりが蔓延する末世に生まれあわせ、こんなにも心が憂鬱になってしまうことばかりを見聞きして、つくづく、哀れと思ったのだった。

文中の色文字は鴨長明が用いた用語をそのまま用いています